



学校事例 ②

東北 地区

岩手県 釜石市立鵜住居小学校

教育の原点を見つめながら 学校を再開し、 未来の町を支える人を育てる

どんな大人になってほしいか



- 人にしてもらったことに対して、感謝の気持ちを忘れない人
- つらい経験でもきちんと受け止め、未来へと進む、たくましい心と体を持つ人
- どこにいても地域の復興を担っていける人

そのための小学校の役割



- 人や物に対する感謝の気持ちを持ち続けられるように、子どもとかかわっていくこと
- どのような状況にあっても、将来にわたって必要な力は変わらない。生き抜く力を付けるための授業をしっかりと行うこと
- 当たり前の日常を大切に、地域や保護者が寄せる信頼に応えられるような学校であり続けること

未来に残したい 鵜住居小学校の力強さ

- ◎ 地域特有の課題を重視し、防災教育を徹底して行っていた。災害時にはその訓練を生かして避難した。命の尊さ、物の大事さ、絆の大切さを改めて実感し、皆で学ぼうとしている
- ◎ 2校に分かれても自校の文化を守るという強い意志を持つ
- ◎ どのような状況でも、明るく前向きな姿勢で子どもや保護者に向き合う。目指す子ども像を共有し合い、授業を核として、将来に必要な力を子どもに付けていこうとしている



釜石市立鵜住居小学校
研究主任、1学年主任。「子ども、保護者、学校をつないでいく存在でありたい」

佐々木香理
Sasaki Kaori



釜石市立鵜住居小学校
教務主任、6学年担任。「子ども一人ひとりに目を向け、心の苦しさや喜びさを分かるように接していきたい」

千葉玲子
Chiba Reiko



釜石市立鵜住居小学校副校長
真壁信義
Makabe Nobuyoshi
「先生方が、安心して子どもと向き合い、自分の家庭生活も営めるような環境をつくっていきたい」

真壁信義
Makabe Nobuyoshi



釜石市立鵜住居小学校校長
坂下俊彦
Sasashita Toshitiko
「教えることは学ぶこと。教師としての謙虚さを忘れずに、子どもたちと向き合っていきたい」

坂下俊彦
Sasashita Toshitiko

School Data

設立	1879(明治12)年
校長	坂下俊彦先生
児童数	272人
学級数	12学級(うち特別支援学級2)
所在地	〒026-0043 岩手県釜石市新町1-58 双葉小学校内(1~4年生)
TEL	0193-23-5122
所在地	〒026-0052 岩手県釜石市小佐野町3-5-37 小佐野小学校内(5~6年生)
TEL	0193-23-5656
E-mail	unosumai-es@edu-kamaishi.jp



*本記事の内容は、取材時(2011年8月)のものです

2校に分かれて教育活動を再開 行事を通して「鶴小の文化」を守る

三陸の沿岸部に位置する釜石市立鶴つる住居すまい小学校は、2011年3月11日の東日本大震災で校舎の3階まで浸水し、甚大な被害を受けた。11年12月に仮校舎が完成するまで、1〜4年生は釜石市立双葉小学校内で、5〜6年生は双葉小学校から車で5分程の釜石市立小佐野こさの小学校内で学ぶ。

8月中旬の2学期開始に当たり、坂下俊彦校長は全教職員と次のことを改めて話し合った。

「失ったものは計り知れませんが、『命の尊さ、物の大事さ、絆の大切さなど、今だからこそ学び取れるものがあるはずだ。引き続き子どもに寄り添い、教師が心一つにして、前向きな気持ちで明るく取り組む姿を示そう』と確認し合いました」

2学期の重点課題としたのは次の4点だ。

①学校行事で、学校教育目標・学校課題の具現化を図る

1学期に出来なかった修学旅行、6年生が最終学年として体験すべき学習発表会などの行事を行う。また、1学期に全校で集まったのは始業式、終業式、運動会だけだった。2学期は児童会・委員会活動を定期的に行う。

②分ける授業・出来る授業を目指す

震災があってもなくても、生涯にわたって必要となる力は変わらない。むしろ、こんな時だ

からこそ確かな学力を付けることが重要である。45分間の授業の確保に努め、1単位時間の授業のねらいを明確にし、子どもが「分かった」「出来た」と感じられるよう工夫する。そのための授業研究を行う。

③教育愛に根ざした、児童理解に基づく指導をする

子どもの心のケアを継続する。夏休み中に、多数の子どもが避難所から仮設住宅に転居するなど、家庭環境が変化した。保護者も悩みながら生活をしていることもあり、その影響を過度に受けた場合などは問題行動が懸念される。「学校を休まない」を目標に「早寝、早起き、朝ごはん」を奨励し、毎日、一人ひとりの健康状態を把握する。

④分散した学校運営をスムーズに進めるようにする

毎週水曜日と金曜日、時間を捻出し、教職員全員が双葉小学校に集まり職員集会を行う。教師のつながりを維持し、気持ちをは合わせるために、全員で顔を合わせて情報を共有することを徹底する。報告・連絡・相談を今まで以上に意識して行う。

真壁信義副校長は、学校行事の重要性を次のように話す。

「学校行事は、学校としての一体感や6年生のリーダー意識などを育むために大切な場です。この基盤があつてこそ学力も育めます。一つひとつの行事を大切に、鶴住居小学校とし

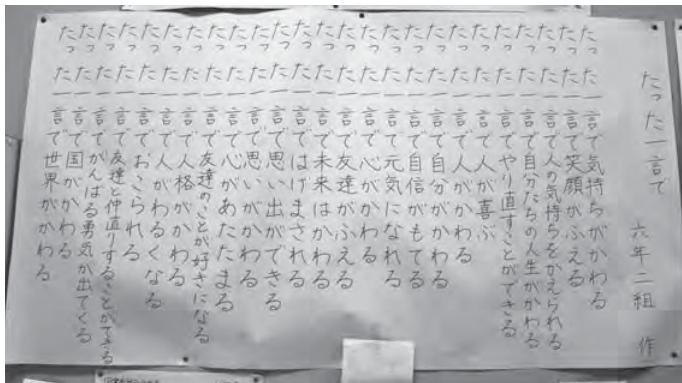
ての文化を守っていきたくて考えました」

「普通の」学校生活が 子どもたちのリズムを取り戻す

教室には子どもの大きな声が響き、休み時間には外で遊ぶ姿が見られる。しかし、この日常を取り戻すまでには険しい道のりと、それを乗り越えた教師の力があつた。

震災時には、日頃の防災教育の成果により、高台へ向けて速やかに避難できた。しかし、自宅に帰っていた2人の子どもの尊い命が失われ、事務職員1人は依然として行方不明だ。また、7割弱の子どもが自宅を失い、保護者が被害に遭った子どももいた。3月11日から全ての子どもの保護者に引き渡すまでの1週間、教職員は不眠不休で子どもと共に避難所で過ごした。その後、子どもの現状把握から準備を始め、4月26日に2校に分かれて新年度が始まった。多くの子どもは避難所や親戚宅からスクールバスで通い、そして、被災地にある学校の多くがそうであるように、同校でも約80人が転校した。

1学期の最重要課題は、「子どもの心のケア」だった。大阪市より二人の臨床心理士が1か月間派遣され、教師は子どもへの声掛けや対応の仕方を学んだ。臨床心理士による面談を、担任も同席の上、子ども一人ひとりと行ったり、「こころとからだの健康観察シート」を用いたりして、心理状態の把握に努めた。研究主任で1学年主任の佐々木香理先生は、次のように話す。



写真上 6年生の授業の様子。音楽室に机を並べて使用している
写真下 別の学級の教室には、後ろの壁にクラス全員で書いた詩が掲げられていた

「学校が再開すると、子どもは『学校に行ける』『友だちに会える』という喜びに満ちた顔で登校してきました。その笑顔が私たち教師の支えでした。ただ、『勉強よりもまずは生活』という状況下で、えんぴつもノートもなく、学校から1か月半の間、離れていたため、最初は学級集団として何か『ずれ』がありました。身に付いていた学習のルールや生活のリズムが崩れてしまっていたのです。日々、学校があることが、子どもたちの安定した生活基盤となっていることを痛感しました」

教務主任で6学年担任の千葉玲子先生も、次

学校再開後、授業は教科書と教具が全員分そろった教科から行うという状況だった。更に、スクールバスの関係で1時間目の開始時間に学級全員がそろわず、授業を始めるのが難しかった

「被災したから出来ない」ではない 生き抜く力を付ける授業研究を

あることのうれしさを感じたのは教師も同じだ。「元氣な子どもに会える。当たり前だったことが実にうれしい。新任の時の気持ちを思い出した」「新1年生の机に名前を貼る喜びを感じた」。このような声が聞かれた1学期だった。

のように話す。「普通に」校舎で勉強することが、子どもの心の安定につながるのだと感じました。避難所などではストレスがたまることも多いと思います。学校は子どもにとって、友だちや教師に会える、安心できる場所だということを再認識しました」

学校が「普通に」

た。そのような中で、授業研究をするのは無理ではないかという声も出ていた。

同校は「学力向上フロンティアスクール」の指定を受け、前年度まで算数を中心に授業研究を進めてきた。11年度は、新学習指導要領を受け、言語活動の軸となる国語も加え、更に各教師が個人課題を設定し、研究を進めようと計画していた。坂下校長は次のように話す。

「今年度は、授業時数が足りず、2校に分かれていたので授業を見に行くのも大変だということもありました。しかし、目の前の子どもにも力を付けるのは授業です。完成度の高い、型にはまった立派な授業はしなくていい。このような状況だからこそ、子どもの様子を丁寧に見取り、実態に合った授業をつくる必要があると意見がまとまりました」

研究計画は見直され、学級の実態から、教師の個人課題も設定し直した。佐々木先生は言う。「『被災したから出来なかった』とは言えません。これからも子どもは生きていかなければなりません。そのため確かな学力、当たり前前の学力と社会性は付けようと思ったのです」子どもにとって「学び」は喜びでもあると、千葉先生は改めて感じたと話す。

「避難所生活の中で、宿題を出すことが適切なのかを悩みました。しかし、以前は宿題に積極的に取り組まなかった子どもも含め、全ての子どもがきちんと宿題を提出しました。子ども

図 保護者から寄せられた声

- ◎非常に落ち着いた授業風景でした。何よりも先生方が「普通」に授業を進められている姿が頼もしく感動的でした。これまでの鶴小の先生方の並々ならぬご努力とご尽力に、深く心より感謝申し上げます。(後略)(2年生保護者・5月の授業参観の感想)
- ◎久しぶりに鶴住居小学校の子どもたちを見てどうしようもなく泣きたくなりました。(中略)運動会を見に行ってもよかったです。子どもたちの元気をもらって私も頑張ろうと思いました。(後略)(4年生保護者・6月の運動会の感想)
- ◎今年は学校行事も出来るのかな? 6年生最後ののに……と思っていたので、運動会を「鶴住居小学校」として出来たことに校長先生をはじめ先生方に感謝します。子どもたちはすごく輝いて見えました。「鶴小」としてやりたいと息子も言っていたので、実現できてよかったです。全体練習も数えるくらいしかしていませんと聞きましたが、それぞれが自分の役割をこなし、上の子が下の子の面倒を見て、子どもたちの成長を見ることが出来たのでよかったです。忘れることの出来ない運動会になりました。(6年生保護者・6月の運動会の感想)

*同校の学校だよりから一部抜粋

狭しと貼られている。「今、子どもたちはようやく、自分に起きた出来事を振り返れるようになってきました。高学年の中には、震災の時のことを作文に書く子どもも出てきました。そこには、周りの人への感謝の気持ちがつづられていました。そうした気持ちをつづらなくても忘れないように、子どもたちとかかわっていくことが、私たちの役目だと思います」(真壁副校長)



学校再開に当たり、教科書や文房具、ランドセル、体操服、問題集など多くの学用品が各地から届いた。廊下には、全国の小学校、海外の学校から送られた励ましのメッセージが所

「低学年の子どもは何が起きたのか理解できていない段階のようです。時間が経過し、自分が経験したことを認識できるようになった時にしっかりと受け止められる心と体のたくましさも育てていきたいと思っています」(佐々木先生)

鶴住居は、地域で子どもを見守るとい文化のある町だ。新しい街づくりも小・中学校を中心に言う予定だという。

「鶴住居には以前の天津波の石碑があり、『総合的な学習の時間』で昔の災害の学習をしました。今回の震災後、ある子どもが『今度は自分たちが津波を語り継ぐんだね』と言いました。10年後、20年後、町を支えていくのはこの子どもたちです。たとえこの町に住んでいなくても、自分の体験を後世に伝え、マイナスをプラスに変えられるような人を育てていきたいと思っています」(千葉先生)

坂下校長は改めて今後の決意をこう語った。「一人ではなかなか出来ないことも、仲間が励ましてくれる、協力してくれる、困った時に支えてくれる。子どもも教師も、それを感じられるのが学校です。そうした当たり前のことが、どんなに素晴らしく、どれほど重要であるかを、私たちは思い返すことが出来ました。毎日、元気な子どもに会える。『おはようございます』と、みんなですわってあいさつが出来る。今まで何も感じていなかったことが、実にうれしく感じられます。このような教育の原点から、再び鶴住居小学校をつくっていききたいと思っています」

は『学びたい』という意欲を持っているのです。その意欲に添えていくためにも、授業研究は重要だと思えます」

子どもと先生の姿に 「忘れられない運動会になった」

子どもが毎日通学するという「当たり前」の繰り返しは、保護者にとっても安定した時間をもたらししている。

「『学校が始まってよかった』『授業をしてくれてありがとう』という声がたくさん寄せられました。朝、子どもを学校に送り出す。夕方、子どもが学校から帰ってくる。子どもが安定し

た生活を送ることで、保護者自身も日常生活を取り戻しているようです」(真壁副校長)

家庭の状況は子どもに大きな影響を与える。そのため、同校は保護者の不安を払拭することも重視し、5月には授業参観、6月には運動会、7月には保護者面談と、保護者が月に1回は学校を訪れる機会を設けた。教師の前向きな姿を見せると共に、学校の方針や今後の対応も伝えられている。学校へ寄せられた保護者の声からは、同校への深い信頼が感じられる(図)。